

豊かで美しい音について、先月号からの続きをお話しましょう。試験やコンクールなどで演奏する場合、たとえば、暗譜が危うくなった、小さなミスタッチをしてしまった、などの失敗を演奏者はたいへん気にします。また、1つもミスなく弾けたと思っても結果が思うようではなかったということもよくありますね。それは、フルコンサートグランドピアノをうまく鳴らすことができず、スケールが小さい印象になってしまうことが結果の原因になっていることがあります。大きな楽器を十分に鳴らせないと、アピール性が弱くなり、小さなミスなどよりも結果に影響することがよくあります。

このように「豊かで美しい音」は、音楽を表現する上で、とても重要な要素です。前回は、fを豊かに鳴らす方法をお話しましたが、pも遠くまで届く美しい響きが大切です。大きな楽器をfでもpでも十分に鳴らす方法には、いくつかの要素があります。先月お話しした、自然な姿勢で腕が自由に脱力した状態ができましたら、次に「タッチ」に注目しましょう。楽器を鳴らすには、打鍵の瞬間が最も重要です。まず、指先の第1関節をしっかりさせ、腕の重みを指先にすべてのせる感覚が必要です。その際、鍵盤の一番下まで打鍵することと打鍵が終わると瞬時に脱力することで、美しく豊かな響きが得られます。また、学生のレッスンの際、ミスタッチを恐れて、鍵盤にいつも指が触れている人が多いのですが、打鍵には、ある程度の高さが必要です。ピアノは、不思議な楽器で、鍵盤から離れないで打鍵するより、ある程度の高さから打鍵した方が、ハンマーの動きが俊敏になります。ハンマーの動きを速くすることで「美しく豊かな響き」になるのですが、その動きを得るには、よい姿勢、指先の安定、打鍵の瞬間の出力と脱力などが、深く関わってきます。たとえば、ショパンのエチュード作品25の4のような、和音でもあり、pと表示されている曲も同じ方法で美しく豊かなpが実現できます。

手が小さい人は、特にfの和音が鳴りにくいと思いますが、一度、手の構造を確認してほしいと思います。近年、手の骨や筋肉の解剖学的な本もたくさん出版されていますので、特に手の小さい人は、指の骨が手首のつけ根から発していることを知ってほしいと思います。つまり、指と指の間を広げようとしても、ほとんど意味がなく、逆に指の故障を起こす可能性があります。手首近くの骨のつけ根部分を広げようとする、すぐにでも1mmくらいは大きくなります。

この解剖学的なアプローチと打鍵の瞬間の「タッチ」を総合的に取り入れることで、大きなピアノという楽器が、気持ちよく響くようになります。スポーツのアスリートたちは、身体の構造を研究し、柔軟で美しい動きを追求していますが、ピアニストも同様のアプローチをすることで、音楽表現の幅を広げることができます。ここで、注意しなければならないことは、まず、どのような演奏がしたいのか、また、どのような表現をしたいのか、という演奏者自身の音楽的な理想を持つことが、第一に重要であるということです。その理想的演奏を実現するために身体構造も考えることで、さらに高度な技術を手に入れることができます。